

八月七日の読売新聞の記事

岡崎 衣里子

私は、「救えはから」にて痛切という見出し  
川目に止まり、記事を読みました。

記事の日付は八月七日であり、広島で平和  
記念式典が行われた次の日でした。加藤さん  
は六十九年前、広島市立段原小学校という爆  
ば"地から約二キロの場所で被爆しました。そ

こでは校舎の下敷きになったくさんの子供  
たちがおり、目の当たりにしてながら救えは  
たと言います。助けてあげられなくて、  
ごめんなさい」という言葉が胸にこりまし  
た。

私は中学三年生のとき、修学旅行で広島に行  
き、原爆ドームをこの目で見ました。今までの  
何気なく生活していた私ですが、鉄骨がむ  
き出しじゃない?ていうその姿を見て、今までの  
ことはとても幸せだったけど実感させられ

ました。その後は平和記念資料館にも行きましたが、八の痛くなるものばかりでした。手の絵もその一つで、二度とこのようないいとこを思い出します。記事に載っていましたが、あの日の出来事を知っています。私は、松と同じ様に、あの日の出来事を知っています。私の一人にはといいます。牟田君は祖父から式典で、平和への誓いを読み上げた牟田君もその一人といいます。牟田君は祖父から自分の父親が体の半分に大やけどを負ったことがあります。牟田君は祖父からと、看病したが傷口にウシガれいで、と聞いてこれくなり二飯が食べられなくなりました。やはり被爆体験を聞くといふと、いいます。やはり被爆された方が大切なのだと思ひます。

今は高校生が被爆された方がから体験談を紹介していくとすると運動が行われていろといふと、いります。牟田君、インターネットで掲載して体験を受けたニュースも耳にします。しかし、受け継いだいぐのはこう簡単にはいかなくなってきて、いります。記事によると、被爆者の平均

年齢は七十九歳を超えたそうです。また、加藤さんのように、あの日のことを思い出すのが、すと怖く、誰にも被爆体験を語れなかつたという方もおられるそうです。

私たちは今、とても平和な毎日を過ごしていきます。この幸せな時間を作るために私は、自分自身が平和について改めてもう一度考え直す必要があると思います。私は関係ない、こんなことはもう起ころはすがないと思わずば、被爆体験談に耳を傾け、一日一日を大切に生きていいくことが大事です。私自身も毎年八月六日、考え方を直す時間を設けていました。

# 「救えなかつた」痛切

## 広島原爆忌

43年ぶりに雨が降る中、平和記念式典が執り行われた6日、ヒロシマは鎮魂と平和な世界を願う祈りに包まれた。あの日から69年。被爆者の平均年齢は79歳を超えた。レインコートを着たり、傘を差したりした参列者らは「あなたたちの記憶は必ず、私たちがついでいく」と誓った。

△本文記事一面



柱や梁に体を押さえつけられた少年の絵。加藤さんは、「手を握る」としかできなかった(広島平和記念資料館所蔵)

## 広島の加藤さん がれき下の少年 絵に残す

広島の加藤さん がれき下の少年 絵に残す  
柱や梁に体を押さえつけられた少年の絵。加藤さんは、「手を握る」としかできなかった(広島平和記念資料館所蔵)

43年前、爆心地から約2キロのこの場所で、倒壊した段原国民学校の校舎の下敷きになった子どもたちを目の当たりにしながら救えなかつた。「ただ『元気出せ』と言うただけでなんにもできんかった。記憶に残さないといつかん」。約20年前、助けを求める子どもたちを絵にし、慰靈のために置かせてもらったお地蔵さんに毎年会いに来る。

同校から東へ約1・5キロ



子どもたちを思い、地蔵にお参りする加藤さん(6日、広島市の市立段原小学校で)



## 被爆体験しつかり聞く

被爆体験しつかり聞く  
「子ども代表・牟田君」  
「子ども代表で、『平和への誓い』を読んだ広島市立尾長小6年の牟田悠一郎君(11)は5月、祖父(73)から4歳時の被爆体験を聞いて、作文を書いた。

両親や弟も一緒に夕食の席で、祖父はゆっくり話した。被爆した自分の父親が体の半分に大やけどを負つたこと、看病したが傷口にウジがわいてきたこと、それを毎日取つたこと。「学校で読んだ『はだしのゲン』に描いてあるのと同じだ」。牟田君はこわくなつてび

飯が食べられなくなつたという。父親は「そんな話、聞いたことがなかつた」と驚いたが、祖父は「別に言うことでもない」と思った。「別に言うことでもない」とぼつり。いつも笑顔で勉強や釣りを教えてくれる優しい祖父がその時だけは厳しい表情になつた。

「本当はつらくてずっと言えないかったのかかもしれない。平和の尊さを知ろうと思ったら、僕たちからしつかり聞いていくことが大事なんだ」と気付いた。式典終了後、「みんなの前で堂々と出来たので満足です」と話した。

い午前9時頃だった。

「学校の下にまだ子どもが残つとるんです」。段原国民学校の教頭だった。引張られるように連れて行かれた学校は跡形もなく崩れていた。「無事でいるはずがない」と思いながらも、がれきの下に潜り込んだ。

暗闇の中から子どもたちのすり泣きが聞こえ、太い梁の下で少年が一人ぐつたりとしていた。頬をたたいて声をかけると、かすかに動いた。無我夢中で梁を押し上げようとしたが、びくともしない。頭上からバチバチという音が聞こえてくる。火の手が迫つていた。

もう助けられない。「俺もお前も戦地で戦っているのと一緒じゃ。戦争とはこう思つて直した。

「妻も被爆の影響かもしれない。悲惨な目に遭つて死んでいたあの子たちのことも、ちゃんと伝えていかなければ浮かばれない」

伝え続けていくつもりだ。

いうもんじゃ」。少年に向かって叫んだ。説得している

ようで、自分に言い聞かせ

るよう。「もう逃げて」という誰かの声とともに外へ

引きずり出された後、校舎内では子どもら16人が亡くなつたという。

終戦後、電力会社に就職して山口県で働き、1975年に広島へ戻つた。でも、思い出すのがずっと怖く、誰にも被爆体験を語れなかつた。94年、同じく広島で被爆した妻が乳がんとわかつて思つた。

月6日、段原小の児童に体験を話す。この日前も約320人に絵をスライドで見せた。「69年前のこの時間、ここにあつた校舎が燃

えていた。あんな悲劇をもう起こさないためにはみなさんの力が必要なんです」

これからも命ある限り、これまで命ある限り、伝えていくつもりだ。

絵を描き始めたのはそん

な思いから。がれきの間か

ら手を伸ばしていた少年、右のひじだけ下敷きになつた。それでも自分がやらなければ誰が語り継ぐだろ

うかと、約10枚の絵を仕上げた。